

行事と生活 —宮本常一『民間暦』—

学生時代一般教養「文化人類学」「科学技術史」は面白かった。各国神話の共通性や江戸時代技術史は知的興味を引いた。民俗学も七夕や八朔の身分地域による違いに感心した。(菊地実)

民俗学の病理

講義は面白かったが、担当教員が「柳田國男先生・・・のお言葉」とまるで〇〇の如く神格化しているのに驚かされた。柳田國男は『海上の道』をはじめ数冊読んだが、フレイザー『金枝篇』や海外民族学・文化人類学と比較すると井の中の蛙のように感じられた。クリスマスが冬至祭、メイデーは春祭りといった起源や各国比較に目から鱗が落ちた。ただ民俗学も西日本や東北地方、山村と漁村との町比較は有用だった。その頃未来社から出版されていた宮本常一著作は、全国行脚した事例の豊富さ、特に周防大島(屋代島)出身者らしく海辺事例が新鮮だった。

行事の多様性と共通性

「民間行事は・・・多くはその起源を知ることさえ困難なほどに古い淵源と歴史を持っており・・・各地共通の原則」(58頁「はじめに」)。以下明治からさらに遡って江戸時代の行事資料を紹介している<図表>。

年中行事は民俗学以外でも有職故実の記述、風俗史、俳句季題としての著作が多い(65頁「要約」)。ただし有職故実家は少しでも古く権威化したがるので、伝承はどうしても尾鰭が拡大しやすい。風俗史生活史研究者は多くの有職故実に対して否定的だ。年中行事に目を向けたのは江戸時代人で、貴重な記録を多く残している。本書では屋代弘賢や出羽角館で数奇な一生を終えた菅江真澄など、江戸時代の貴重な風俗記録に触れている。

年中行事と民間暦

「年中行事」は「趣味」と同じように本来日本語にはな



<講談社学術文庫>

く、比較的新しい用語らしい。『東京年中行事』などから推察すると幕末か明治の言葉で、古くは「節」「せつ」「セチ」「オリ目」。明治に入って国旗掲揚習慣が広まり、「旗日(はたび)」という言葉も使われた。私も子供時分に周りの大人から「旗日」という言葉を聞いた覚えがある。

「民間暦」を『歳時習俗語彙』から見ると、目次は七十一。①太陰暦＝大陸から渡来した太陰暦は、農業を中心とした自然暦と多くはマッチングしている。正月から晦日まで主要行事が並べられている。この中で節分・彼岸は太陽暦由来で、初午・亥の子は干支によっている。「日が一定の行事の大部分は正月と盆に集まっている・・・年中行事の三分の二は正月と盆」(79頁)。そういえば「盆と正月が一緒にきた」というフレーズは今でもよく使われる。民間歴と官暦が一致しない代表例として、柳田説「正月元日／大正月と正月十五日／小正月をあげ、女正月の別名を持つ小正月の方が大切であつたらしい」を紹介している。②日時＝残りの行事は十五日と十三日、ついで七日と八日に集中。「十五」「八」は月と関係している(79頁)。さらに「一日・十五日

＜図表＞民間暦研究

時期	書籍	内容
江戸期 (1800年代)	『秋田風俗問答』他	屋代弘賢(江戸幕府の右筆)による各藩の風俗習慣を調査したもの
明治初年～	『人類学雑誌』	正月行事について各地の報告をまとめた
明治22年～	『風俗画報』	各地の年中行事・社会風俗を報告
大正2年～	『郷土研究』	柳田国男の社会問題研究
大正14年～	『民間風俗年中行事』	廣谷雄太郎編、図書刊行会
大正14年～	『民族』第一巻に号	全国の正月15例を比較研究

＜本書60-61頁を元に作成＞

が特に大切にされたのは、別に行事のない月でも広く各地に神社参拝の日であり」と、信仰との関連について宮座研究と商業座研究について触れている。③宮座と商業座＝研究そのものは古文書が多く残っている商業座研究が古いが、宮座の方がより古くまで遡っている。商業座は四日市・六日市・八日市・十日市といった地名にも残っている。また半世紀前関西出張で、タクシー運転手から「五十日(ごとうび)は車が混む」と聞き、支払日だということを知った。

猪子祭りと雛祭り

現在十月末日／晦日(みそか)はハロウィンとして定着し、保育園・幼稚園ではクリスマスを上回る行事となっている。その内容を見ると、猪子祭りと類似している。猪子祭りは西日本を中心とした農耕刈り上げ祭。長野では案山子を祭る日であり、子供たちが一軒一軒を訪れる。これが江戸時代猪子餅に変化し、武家式楽として定着していた。

雛祭りも現在の雛人形は元禄雛・享保雛だが、「われわれの身につく災いをこの雛に託して流すべきものであったらしい」(89頁)。いわゆる紙の形代＝川や海に流す流し雛による伝統は「禊」として、今なお各地に残る。

さらに地域によって祭りの意味は逆転する。「節句は、中央地方では目出度しとして遊ぶ・・・青森県あたりでは悪い日で・・・忌みつつしまなければならない」(89頁)。

行事の変化

狩猟から農耕・漁業に移り自然暦による行事が定着した。やがて大陸から太陰暦や干支が導入、さらに古代-近世の主流となった仏教行事も定着した。また西日本と東日本の地域差。宮中祭事と地方伝播。時代により行事は大きく変化してきた。中でも江戸時代の三都や数百の城下町で都市／農村、武家／農漁民といった行事となった。これに一撃を加えたのが明治五年の太陽暦導入と文明開化による産業(工業)化である。

ほとんどの行事は農耕に起源を持つ。大多数が都市住民となり、職業の中心が工業からサービス産業に移り、土や自然・伝統的宗教から離れていく。小正月・花祭り・八朔・亥の子餅・月見、多くの行事が薄れ消えていく。民俗学者の中には、「もはや再録する伝承は皆無」という論すら出ている。

商業主義による特定行事の活発化や変形も注目される。サンタクロースやトナカイが今日のような姿になったのは、二十世紀米国の百貨店PRなどによるところが大きい。バレンタインデーを私が知ったのは高校生の頃で、男士生徒のほとんどが知らなかった。ハロウィンは戦前ハリウッド映画でも地味に紹介されていたものの、今日のように定着したのはあのスプラッター映画のおかげであろう。えびす講は関東ではほとんど知られてなかったが、今や、太すぎて食べにくい「太巻き」を食べる記念日となった*。

しかしそうした商業主義やメディア効果を安易に批判するのはいかがと思う。「ハレとケ」という言葉は古過ぎるかもしれないが、非日常行事・祭りはいつの時代も生きる節目であろう。

*：数年前売上二千億円ほどの中堅スーパーに取材したら、太巻きだけで一億円の売り上げがあったと聞いた。行事の宣伝効果は凄い。

■筆者/ 宮本常一(ミヤモト ツネイチ)1907-1981年、山口県生まれ。天王寺師範学校卒、武蔵野美術大学教授。全国各地のフィールドワークで、民俗学だけでなく観光学にも大きく寄与した。著者多数
■書誌/ 未来社『民間暦』(1974年)を元に論文追加。1985(昭和六十)年12月5日講談社刊行、A6判／346頁